婚約破棄で追放されて、幸せな日々を過ごす。❷

……え？　私が世界に一人しか
居ない水の聖女？
あ、今更泣きつかれても、
知りませんけど？

末松樹
Itsuki Suematsu

Regina BUNKO

ミア
土の聖女を名乗る
ドワーフの女の子。
正義感が強く元気いっぱい。
実年齢は……!?
トリスタン・
フランセーズ
フランセーズ王国の第三王子。
勘違いと思いこみが激しい。
アニエスをパーティから
追い出した張本人。
イナリ
アニエスの神水のおかげで
力を取り戻した妖狐。
モフモフで可愛い
子狐の姿になれる。
食いしん坊で
アニエスの料理が好き。
コリン
孤児院出身の獣人の少年。
ハムスターに変身可能。
食いしん坊で弓の名手。
ソフィア
ドリアード（樹の精霊）で
フランセーズーの薬師。
アニエスの力に
惚れ込んでいる。
ユリア
花の国の王女。
トリスタンが目覚めさせた
魔の力のせいで
ピンチに陥る。
アニエス
チートな能力を持つ水の聖女。
トリスタン王子のパーティでは
マッパー兼料理係だったので
料理が上手。
可愛いものに目がない。
登場人物紹介

目次

婚約破棄で追放されて、幸せな日々を過ごす。2
……え？　私が世界に一人しか居ない水の聖女？
あ、今更泣きつかれても、知りませんけど？
書き下ろし番外編
土の聖女だと認められた直後のミア

婚約破棄で追放されて、幸せな日々を過ごす。2

……え？　私が世界に一人しか居ない水の聖女？

あ、今更泣きつかれても、知りませんけど？

プロローグ　水の聖女？

私、アニエス・デュボアは、フランセーズ国のバカ王子――もとい、トリスタン王子の婚約者として行動を共にしていた。

だけど、水魔法しか使えないからとパーティを追放され、婚約破棄される事に。

水の巫女だった私は、古いしきたりで無理矢理婚約させられていた。だから、むしろ嬉々として王子の元を去り、久々の自由の身を満喫していた。

せっかくだからいろんな国を回ってみようかと思いながら野営の準備をしていた私の目の前に、出会ったら即死間違いなしと言われる九尾の狐――最上位S級の魔物「妖狐」が現れる。

絶体絶命のピンチ！　と思いきや、妖狐は私の作ったスープを所望する。

私の分まで全てを食べ終えると妖狐は、私が水魔法で生み出した水が、飲むだけで一定時間能力を向上させ、万能薬の効果まである神水で、おまけに私が世界に一人しか居

ない水の聖女だと言い、私と行動を共にすると一方的に宣言してくる。

というのも、妖狐は過去に人間と戦って、その力を封印されていたのだとか。

私の神水を定期的に飲んでいれば、本来の姿で居続けられるらしい。この本当の姿っていうのが、ものすごく中性的で綺麗な人だった。彼の名前は、イナリと言うそうだ。

イナリは出会った時の大きな狐の姿になったり、可愛い小さな狐の姿になったりできる。

また、異空間収納魔法っていうのを使って重い荷物を簡単に運んでくれたりするので、かなり助かる。

でもイナリはお肉に目がなくて、サンダードラゴンの雛（ひな）やブルードラゴン……要は、人間が食べたら死んじゃうようなすごい魔物のお肉を持ってくる。

それを知らずに私も食べてしまい、神水のおかげで無事だったのだけど、雷魔法や氷魔法が使えるようになってしまった。普通は、使える魔法って生まれた時から変わらないものなのに。

それから、冒険者ギルドで出会った、ハムスターの獣人の可愛い男の子コリンとパーティを組む事になった。

そして、フランセーズ国随一のすごい薬師で、樹の精霊ドリアードであるソフィアさ

んのお仕事を手伝うという仕事を請ける。

そこでポーションの作り方を教わり、神水を使ってすごいポーションを作れるようになった。それで街の人たちにも喜ばれ、充実した日々を過ごしていたんだけど――一体どうやったのかは分からないけど、封印されていたイナリの力の一部を得たトリスタン王子と再会してしまう。

トリスタン王子からイナリの力を取り戻し、お隣にある太陽の国イスパナにもイナリの力の一部があると分かったので、早速向かった。

その道中に立ち寄った街や村で、日照りによって干上がってしまった田畑を回復させてほしいという依頼を請ける。

神水を使うと、枯れていた植物を復活させる事ができたんだけど、どういう訳かその様子を見たイスパナの人たちから土の聖女と呼ばれてしまう事に。……一応、私は水の聖女らしいんだけどね。

イナリの力の一部が封じられている場所に着くまで、助けてほしいという人たちを見捨てる事もできず手を貸し続け、大勢の人に土の聖女だと誤解されたまま目的地である街に着いたんだけど、そこにファイアー・ドレイクという炎の魔物が現れ、街が壊滅状態に。

魔物を街に放ったのは、なんとイスパナで国民に崇められる太陽の聖女だった。でも、彼女は偽物の聖女だったのだ。

イナリに協力してもらい、神水を使ってファイアー・ドレイクを封印する事ができ、本物の太陽の聖女ビアンカさんの力で大勢の怪我人を治した。

そして、イナリの力の一部も回収したところで、私たちは一旦フランセーズ国へ戻ってきたのだった。

第一章　鉄の国からの招待状

イスパナの国ではいろんな事があったけど、無事にフランセーズ国の王都へ戻ってきた。

そのままソフィアさんの家に直行し、門の前で立ち止まる。

「お土産も用意したし、イナリも一緒だし……怒られないよね？」

「はっはっは……何かある度に、ソフィアのポーションのせいにしていたからな。……正直、分からん」

イナリなら大丈夫だと言って笑い飛ばしてくれると思ったのに、遠い目をされてしまった。

というのも、私があまり目立ちたくなくて、イスパナの国で神水を使って田畑を復活させたり、怪我人を治したりする度に、ソフィアさんのすごいポーションのおかげだという事にしてきたんだよね。

だから、ソフィアさんの元にポーションを売ってほしいという人がイスパナから来て

いてもおかしくないんだけど、そういう面倒な事って嫌がりそうなのよね。

「うぅ……イナリ。できれば庇ってね。流石にソフィアさんも、イナリには強く言わないだろうし」

「まぁ大丈夫であろう……たぶん」

イナリと話しながら覚悟を決め、家の中のソフィアさんと会話するマジックアイテムのボタンを押す。

「誰だい⁉　よく分からない、奇跡を起こすポーションなんてものなら、ここにはないよっ！」

マジックアイテム越しに、ソフィアさんの声を久しぶりに聞いたけど、ちょっと不機嫌な気がする。今の言葉からすると、やっぱりイスパナからソフィアさんのところへポーションの問い合わせがあったのかな？

「ソフィアさん、お久しぶりです。アニエスです。お話ししたい事があるんです」

「アニエス！　とりあえず中へお入り」

ソフィアさんの声と共に大きな門がゆっくりと開き始めたんだけど、怒ってない……よね？

久しぶりにソフィアさんの家へ入る。ソフィアさんはいつもの場所に座っていた。

「よく来たね。とりあえず、座りな」
そう言って、ソフィアさんが三人分のお茶を淹れてくれる。
「えっと、いろいろあるんですけど、まずは……ソフィアさん。ごめんなさいっ！　これ、お詫びを兼ねた、お土産です」
「……ん？　一体、何の話だい？」
「いえ、実は……」
不思議そうにするソフィアさんに、イスパナで神水を使って畑を蘇らせまくった事と、それをソフィアさんのポーションの効果だという事にした話を説明する。
「あっはっは。そんな事を気にしていたのかい？　別にそれくらいで怒ったりしないよ。まぁ確かに変なポーションを売ってくれっていう人が来たり、土の聖女について教えてほしいっていう人が来たりはしたけどね」
ソフィアさんは大した事じゃないとあっさり笑い飛ばしてくれたけど、それって結構面倒だったんじゃないかな？
「そんな事より、アニエス。ポーションを作ってくれないかい？　アニエスが作ってくれた超級ポーションなんだけどね、普通の治療では治せないような怪我や病気も治せるから、どんどん数が減ってしまうんだよ。材料は用意してあるし、報酬も支払うからさ」

「はい、もちろん大丈夫ですよ」
お詫びの言葉と共に、買ってきたお土産――陶器でできたティーセットを渡すと、ソフィアさんに作業場へ連れていかれ、久々にポーション作りをする事に。
私は神水を材料とした超級ポーションを作り、コリンはソフィアさんと一緒に違うお仕事をして、イナリは子狐の姿でウトウトする。
太陽の国イスパナでは、大変な事が起こってしまったので、この平穏な日常がすごく嬉しい。
数日が過ぎたところで、ソフィアさんの家に、私を訪ねてきたという人が現れた。
「アニエス。客が来ているけど、心当たりはあるかい？」
「私に……ですか？　冒険者ギルドの人ではないですよね？　オリアンヌさんなら、ちょくちょく来ていますし、そもそもソフィアさん宛に来られますし」
「ギルドではなさそうだね。鉄の国ゲーマから来たって言っているしね」
「鉄の国⁉　それって、北東にある大きな国ですよね？　どうして、そんなところから⁉」
鉄の国ゲーマは、その名の通り鉄を使って、いろんな仕掛けを作るのに長けている……って事くらいしか知らないんだけど、このフランセーズと同じくらい大きな国だ。

「わざわざそんなところから来ている訳ですし、とりあえず話は聞いてみます」
「そうかい。まぁ私やイナリ様も居るし、大丈夫だとは思うけどね」
まずは用件を聞くため中に入ってもらう事にすると、親子……かな？　男性と小さな女の子が入ってきて、お父さんが口を開く。
「失礼する。我々はゲーマから来た者である」
「あの、どういったご用件でしょう？」
「うむ。まずは確認だが、貴女が土の聖女アニエス殿で間違いないだろうか」
「……まぁ、アニエスは私ですね」
残念ながら、土の聖女かと聞かれれば、すごく微妙だけど。
私自身は土の聖女だなんて名乗っていないんだけど、イスパナの人たちが勝手に土の聖女だって誤解して、どんどん広まっていっちゃったのよね。
そんな背景もあって、曖昧な返事をしちゃったのだけど、お父さんは何故か満足そうに頷いた。
「なるほど。では、本題に入るのである」
「お姉さん！　土の聖女じゃないよね⁉　どうして、土の聖女だなんて名乗っているのっ⁉」

お父さんの言葉を遮って、娘さんと思われる十二歳くらいの女の子が口を尖らせる。
「待って。突然どうしたの？」
「どうしたもこうしたもないよっ！　だって、私が――ミアが本物の土の聖女なんだもんっ！　お姉さんのせいで大変な事になっちゃったんだから、助けてよーっ！」
「えっ⁉　貴女が土の聖女⁉」
「そうだよっ！　本当だもん！」
そう言って、ミアと名乗る目の前の女の子が事情を説明し始めた。
「あのね、かなり前の事になるんだけど、ミアが土の聖女だよって、お告げがあったの。それを聞いてから、ミアは土の聖女として、一人で皆のために頑張ってきたの」
「お告げ？」
「そうっ！　ウトウトしていたら、聞いた事がない声で話しかけられたの。土の聖女として頑張りなさいって。だから、土に関する事――畑を耕すお手伝いをしたり、舗装されていない道を綺麗にしたり、街に落ちているゴミを拾ったり……地道に頑張って、少しずつミアを助けてくれる人たちも増えてきたの」
「すごい。ミアちゃんは偉いのね」
「えっへん！　そう、ミアはより良い世界のために頑張ろう！　って、頑張っているの！

それなのに、お姉さんが土の聖女だって名乗って派手な事をするから、お姉さんが本物で、ミアが偽者だって言われているんだからねっ！」

ミアちゃんが怒ったり、嬉しそうにしたり、涙目になったり……小さな顔がころころと表情を変えているけど、すごく迷惑をかけたという事は伝わってくる。

「ねぇ、お姉さん。ゲーマには……ミアたちが住む国には、嘘みたいな情報しか伝わってこなくて、尾ひれや背びれのついたすごい話ばかり流れてきているんだけど、何をしたの？」

「なんだか迷惑をかけているみたいだけど、一つ言わせてもらうと、私は自分で土の聖女とは言ってないのよ。街の人たちが勝手に私の事を土の聖女って呼び始めて……」

「そんなのどっちだって良いよっ！　ミアがピンチな事に変わりはないもん！　それより、さっきの質問に答えてよーっ！」

ミアちゃんの問いにどこまで答えて良いものか困ってしまい、子狐の振りをしているイナリにチラッと目をやる。

『おそらく、この童女は本物の土の聖女であろう。未熟ではあるが、強い魔力を宿しておる』

イナリが念話で、ミアちゃんが本物の聖女だと伝えてきた。

だったら、本当の事を話しても大丈夫だろう。
私が水の聖女らしい事。
太陽の国イスパナが日照りで困っていたので、神水で畑や池を蘇らせてきた事。
封印が解かれたファイアー・ドレイクを再び封じてきた事。
などなど、ここ数日にあった事を伝えると、ジッと私の話を聞いていたミアちゃんが、突然大きな声をあげる。
「お姉さんっ！　こっちは困っているんだから、真面目に話してよっ！」
「あの、全部事実だけど」
「そんなの嘘でしょ⁉　土と水が違うだけで同じ聖女のはずなのに、どうしてそんな奇跡みたいな事ができるの⁉　ずるいよっ！」
「そう言われても困るんだけど、イスパナで会った太陽の聖女ビアンカさんは、天候の操作なんていう、私よりももっとすごい事をしていたわよ？」
「うぅ……じゃあ、今ゲーマ中で噂になっている話は全て本当って事なの⁉　こんなのどうすれば良いのっ⁉」
ミアちゃんが今にも泣き出しそうになってしまった。
「あの、そもそもの話だけど、どうしてイスパナでの話がゲーマに伝わっているの？

それと、この家に私が居る事も、どうして分かったの？」
ソフィアさんの家に戻ってきてからこの数日の間、ギルドから来るオリアンヌさんにさりげなく聞いてみたけど、この国ではイスパナの聖都が壊滅したらしい……という断片的な情報だけで、土の聖女の話なんて全く出てこなかった。
南西にあるイスパナと、北東にあるゲーマは隣接もしていないのに、どうしてだろうかと考えていると、ミアちゃんのお父さん――ではなく、土の聖女の協力者らしい――が口を開く。
「簡単な話である。我がゲーマは技術の国。魔法とは異なる独自の技術があり、各国に配置された調査要員から、常に周辺国の動向が伝わってくるのである。またその周辺国の動向は、新聞に載っており、購入すれば誰でも知る事ができるのである」
「えっ⁉　私がどこに居るかっていう事まで、ゲーマの人は皆知っているの⁉」
「それは、別途依頼して調べてもらっただけであり、個人の話は載っていないので、安心するのである」
いや、安心しろって言われても、依頼すれば分かっちゃうんだよね？
ちょっと怖いんだけど。
「とにかく、お姉さんのせいでミアが大変だから、助けてほしいのっ！」

「助けるって言っても、具体的にどうしてほしいの？」
「それも含めて助けてっ！　ね、お願いっ！　同じ聖女同士、協力してよーっ！」
「そう言われると、断り辛いんだけど……ただ、今はポーションを作る依頼を請けているのよ」
「じゃあ、それが終わってからで良いから！　一生のお願いっ！　ねっ、いいよね？　これ……ミアの活動拠点の地図なの。待ってるから、お仕事が終わったら来てね？　ミアの事、見捨てないでね？」
　ミアちゃんに懇願され、一応助ける事になって、二人は帰っていった。
「鉄の国に土の聖女……なんだか大変な事になっちゃったわね」
　まさか土の聖女が近くの国に居て、しかも太陽の聖女みたいに皆に崇められている訳じゃなくて、自分で信者を増やそうと頑張っていたところだったなんて。
　まぁ私も水の聖女だけど、信者なんて一人も居ないし、そもそも増やそうともしていないけど。
　……そう考えると、太陽の聖女っていうのが特殊なのかな？　あんなに大きな神殿があって、国の中心になっているし。一口に聖女と言っても、住んでいる国の文化によって扱いが全然違うみたいね。

「イナリ、ごめんね。成り行きで鉄の国へ行く事になっちゃって」
「む？　我は全く構わんが、何故謝るのだ？」
「イナリは、自分の封印された力を捜したいんじゃないの？」
「その事か。我はアニエスのおかげで、すでに二つも力を取り戻す事ができたのだ。それに加え、神水のおかげで以前を上回る程の力を得ている。だから、気にする必要などないぞ。それに元々、我はアニエスが行きたい場所へついていくだけだ。アニエスの行動を邪魔したり、行き先を変えたりするような事はせんよ」
　イナリがそう言って、気にするなとでも言いたげに、子狐姿のまま尻尾を振る。
「なんだか大変そうな事に巻き込まれているけれど、アニエスはまた他の国へ行ってしまうんだね。すまないが、その前にもう少しだけ超級ポーションを作ってくれないかい？　できれば……これくらいの数を」
　ソフィアさんが眉をひそめながら、改めてポーション作りをお願いしてきた。目標個数を聞いたのだけど……うん、ちょーっと多いかな。
　とりあえず、ポーションをたくさん作らないといけない事が分かったのと、ミアちゃんが待っているのでできるだけ早く……という事で、ちょっとだけ無理してポーションを作る。

それから、三日かかってようやく目標の数に達したので、ゲーマへ出発する事に。
「ソフィアさん。行ってきますね」
「行ってきます……って、今の今まで急ピッチで超級ポーションを作っていたというのに、大丈夫なのかい？」
「私は平気ですよ。その……疲れて集中力が落ちてきたら、神水を飲んでいたので」
「そうかい。じゃあ、冒険者ギルドへ寄って、報酬を受け取ってから行くんだよ」
ソフィアさんに見送られて、イナリとコリンと三人で家を出る。言われた通りにギルドでオリアンヌさんからポーション作りの報酬を受け取ったのだけど、前回同様にソフィアさんから多すぎる額が支払われていた。
「……って、またこんなに多いし」
「うーん。確かに上級ポーションの作成報酬としては破格な感じがするね。だけど、ソフィアさんだし、良いんじゃないかなー？」
さらっとそう言うオリアンヌさん。神水を使って作っているから、普通のポーションではない超級ポーションらしいので、ソフィアさん的には適正な報酬だと考えているのかもしれないけど。必要な材料は提供してもらっているし、やっている作業も上級ポーション作りと同じなんだけどね。

「それよりアニエスは、またどこかへ行っちゃうの？　せっかくフランセーズに帰ってきたんだから、もうちょっとゆっくりしようよー」
「いろいろと訳ありで、困っている女の子を助けに行かなくちゃいけなくて……」
「アニエスがソフィアさんの家から離れたら、私たちも困っちゃうよー！　私を助けるためだと思って、次に戻ってきたら長く滞在してよね。もちろん、ソフィアさんのお手伝いをしながら」
「……あの、私がイスパナへ行っている間に、ソフィアさんの助手は見つからなかったんですか？」
「見つかる訳ないよ！　C級の依頼としては報酬が高いし、魔物と戦ったりする訳でもないから希望者はちょくちょく現れるんだけど……だいたい、一時間くらいかな」
「何が……ですか？」
「ギブアップというか、もう来なくて良いってソフィアさんに告げられるまでの時間だよ。という訳で、アニエスくらいしかこの依頼はこなせないんだ。早く……早く帰ってきておくれよー！」
フランセーズに……というか、ソフィアさんの家に残ってほしいとオリアンヌさんに懇願されながらギルドを出て、鉄の国ゲーマ行きの貸切馬車へ。

コトコトと数日馬車に揺られ、ミアちゃんが活動拠点としている街、ベーリンにやってきた。
「お客さん、着いたよ。ここがゲーマの帝都、ベーリンの街だ」
イスパナへ行った時は、特に急いでいた訳ではないので、いろんな街で依頼を受けていたけど、今回は一気に目的地へ。
「お姉ちゃん。フランセーズやイスパナと、街並みが全然違うね」
「そうね。通りが整然としているのと、高い建物が多いのかな？」
鉄の国と呼ばれているだけあって、フランセーズでは一般的なレンガ造りの家よりも、鉄で造られている建物の方が多いように思える。
お店で売られている服や食材も全然違うので、ちょっと気になりながらも、ミアちゃんの居る活動拠点へ。
「えっと、ミアちゃんからもらった地図によると、どうやらこのあたりらしいんだけど……見当たらないわね」
「アニエス。もしや、ここではないか？　この地下から、先日の土の聖女の魔力を感じるぞ」
「え？　……ここ？」

街に入って、本来の姿に戻ったイナリが指し示すのは、建物と建物の隙間にある謎の階段だった。
扉すらない、人が一人通れる程の階段が、地面の下へ向かっている。
こんな場所にミアちゃんが居るのかと疑念を抱きつつも、地図に該当しそうな場所はここしかない。恐る恐る薄暗い明かりに照らされた階段を下っていくと、元気なミアちゃんの声が響いた。
「あ、お姉さん！　来てくれたんだねっ！」
「えぇ。なんとかお仕事を終わらせたわ」
「ありがとう！　えっと、こっちはコリンちゃんと……そっちの人は？」
「そっか。前は子ぎ……こほん。家に居なかったよね。イナリっていう、とっても頼りになる人よ」
「そうなんだー。イナリさん、よろしくねー！」
そう言って、ミアちゃんが頭を下げているシルエットが見えるけど、とにかく部屋が暗い。
地下なので当然なのかもしれないけれど、窓なんてないし、部屋を照らす照明もかなり抑えられている。

その薄暗い部屋の中を見渡してみると、中に居るのはミアちゃんを除いて二人……かな。

何を話しているのかは分からないけれど、何やら真剣に話し合っているようだ。

「とりあえず、これからの行動の再確認だけど、この鉄の国でミアちゃんの――土の聖女の知名度を上げる、それが目的って事で良いのかな？」

「うん！」

「でも、そのために何をするかは、特に決まっていないと」

「うんっ！　だからまずは、どうやったらミアの事を皆に知ってもらえるのかを教えてほしいの」

教えてほしいって言われても、私も知名度の上げ方なんて分からないんだけどね。

「ミアちゃんたちは、これまでに土に関する活動をしてきたんだよね？　これからさらに知名度を上げるために何をしようと思っているの？」

「えっとねー、まずビラを作って、本物の土の聖女が居るよっていう事を街の皆に周知してー、それから土の大切さを街頭で語ったりー、採掘場で石を運ぶお手伝いとかかなー？」

「なるほど。ミアちゃんは、土の魔法でどんな事ができるの？」

「どのあたりに鉱石が埋まっているかが、なんとなく分かるの」

「うんうん。他には？」

「えっ？　それだけ……だよ？」

鉱石の位置が分かるっていうのは、すごい……よね？　よく分からないけど。

あ、そういえばイナリが、強い魔力を秘めているけど未熟だって言っていたっけ。すごい魔力はあるけど、使いこなせていないって。

けど、一通り話を聞いたものの、どうすれば良いのか分からない。イナリに意見を求めようと目を向けると、任せろ！　といった感じで、大きく頷く。

「うむ。地味だな」

「うわっ！　この人、綺麗な顔して毒舌だよっ！　気にしている事を、ハッキリ本人に言ってきたーっ！」

「ちょ、ちょっとイナリ。もう少しオブラートに包もうよ」

直球で言っちゃったよ。まぁイナリに気を遣えっていうのも、難しい話かもしれないけど。

「待つのだ。我の見立てでは、この童女は魔力の使い方を知らぬだけだ。ならば、使える魔法を増やせば良いのだ」

「えっ⁉　そんな事ができるのっ⁉　教えてっ！」
「うむ。水の聖女であるアニエスの力を借りれば、それくらい朝飯前であろう」
そう言って、暗い部屋の中でイナリが私を見つめているようなのだけど……まさかイナリは、ミアちゃんにアレをさせるつもりなのっ⁉
「イナリ。もしかして……」
「善は急げだ！　アニエスと童女は同行必須として、コリンはどうする？」
「お姉ちゃんたちがするのって、アレだよね？　もちろんボクも行くよー！」
イナリとコリンが顔を見合わせ、嬉しそうにしている……ような気がする。
たぶんだけど、二人ともお腹が空いているだけじゃないのかな？　ここへ来る馬車の中で、ちゃんとご飯を食べていたのに。

「あの……どこまで行くのー？　結構な距離を歩いたよー？」
「うむ。もう少しだな。近くに反応はある」
土の聖女たる魔力を秘めるミアちゃんに、新たな魔法を授けるためだと言って、イナリはベーリンの街を出て、見知らぬ山の中へ。私たちもその後に続く。
ちなみに、私が水の聖女だという事はミアちゃんに話したけど、イナリが妖狐だとは言えず、狐の獣人という事にしている。街を出る時は子狐の姿になり、今は再び本来の姿だ。

「ミアちゃん、疲れちゃった？　お水飲む？」
「うん。少し休憩したい」
「イナリ、少しだけ休んで良い？」
先頭を歩くイナリに声をかけ、全員――土の聖女の信者さんは、活動があるので不参加――に、水の入ったコップを配る。
「あれ？　お姉さんは水を出せるとは聞いていたけど、こんなコップを持っていたっけ？」
「コ、コリンが運んでくれていたのよ」
「そうなんだ。四つも運ぶの重くない？　ミアも運ぼっか？」
「だ、大丈夫よ。コリンは男の子だからね」
「でも、まだ幼いよね？」
ミアちゃんが気を遣ってくれているけど……。コリンは見た目こそ八歳くらいだけど、実際は十三歳でミアちゃんより年上だからね？
イナリの異空間収納魔法の話もできないので、一旦コリンと手分けしてコップを持っ

て、後でイナリに渡そう。そう思っていると、神水を飲んだミアちゃんが驚きの声と共に立ち上がる。

「えぇっ⁉　何これっ⁉　このお水を飲んだら身体が軽くなったし、疲れが吹き飛んだよっ⁉」

「フランセーズで話した、水の聖女の力だよ。体力が回復するのと、能力が倍増するの」

「うぅ……こんなのズルい！　でも、能力が上がるって事はもしかして！」

何かを思いついたらしいミアちゃんが、お祈りするかのように目を閉じると、突然カッと目を見開く。

「すごっ！　ここから西に半日くらい行ったところには大量の鉱石が眠っているし、南東に二日くらい行ったところには銅がある！　範囲も広がっている上に、すごく詳細に分かるんだけど！」

「あ、ミアちゃんの鉱石の位置が分かるっていう、土の聖女の力ね？」

「うん！　普段はもっと近いところじゃないと分からないし、もっと大まかにしか分からないのに！　……お姉さん、すごい！　今からミアも、こんなすごい力が使えるようになるんだよね？」

「えーっと、どんな力が使えるようになるかは、運次第というか、正直私たちにも分か

らないんだけど、なんらかの力は得られるんじゃないかな……たぶん」

これから私たちがしようとしている事……何をするかイナリが口にした訳ではないけど、すでに私も察している。

おそらく、何か土系の魔物の料理を食べるのだろうけど、土系の魔物って何かな？あんまりイメージが湧かないんだけど。

ミアちゃんが土の聖女の力を試しているので、こっそりイナリに聞いてみる。

「ねぇ、イナリ。ミアちゃんに何かの魔物を食べさせようとしているのよね？」

「もちろん、その通りだが？」

「まぁそうよね。ところで、今はどんな魔物を目指して移動しているの？」

「うむ。この先に、アース・ウォームという、土の中に棲(す)む巨大なイモムシの魔物が……」

「却下！　絶対に嫌っ！」

「むっ……しかし、栄養豊富で意外に味も悪くないのだが」

「そんなの関係ないわよっ！　見た目がダメ！　そんなの私、料理できないよっ！」

イナリの想定外の答えに思わず叫んでしまったけど、流石にこれは仕方がないと思う。

「ならば、ジャイアント・アントはどうだ？」

「巨大な蟻とか無理よっ！」

「では、キング・グラスホッパーなど……」
「バッタの王も無理ぃぃぃっ！　というか、虫はやめましょう。本当に無理だから」
調理するのも無理だけど、それをミアちゃんに食べさせるのも、気が引ける……というか、そんなものを食べさせるのは酷すぎる。
もしも私だったら……いや、無理っ！　想像するのも嫌だ。
「うーむ。アースドラゴンでも居れば良かったのだが、近くに居ないのだ」
何故だろうか。さっき挙げられていた魔物と比べると、ドラゴンのお肉が遥かに良いと思えてしまう。
まぁドラゴンのお肉は、実際に美味しいんだけどね。
「さっきから、イナリさんとお姉さんはどうしたの？　ケンカはダメだよ？」
「違うの、ケンカとかじゃないからね」
「もしかして痴話喧嘩？　男女間のいろんなもつれ？」
「ミアちゃんは何を言っているのよっ！」
十二歳くらいのミアちゃんは、そういう事は知らなくて良いのよっ！
……私もほとんど知らないんだけどね。
しかし、土系の魔物を食べてミアちゃんの使える魔法を増やそう作戦！　は、周辺に

居る魔物が虫系の魔物ばかりで、暗礁に乗り上げてしまった。
作戦的には、最初にイナリが目をつけたアース・ウォームっていうのが良いのかもしれないけど、巨大なイモムシなんて絶対に無理だし、食べさせられるミアちゃんにトラウマを植えつけてしまう。
「むっ！　これなら絶対にアニエスも大丈夫だという魔物が居たぞ！　そして、確実にうまい！」
「……一応、先に聞いても良い？　なんて魔物なの？」
「ブラック・ブルという、黒い毛の牛だ。もちろん黒いのは毛だけで、肉はジューシーなのに脂身は少なく、煮ても焼いても、生でもうまい」
「さ、採用っ！」
「ただし……いや、まぁいいか」
最後にイナリが何か言いかけたのが気になるけど、虫やドラゴンに比べれば……いや、比べるまでもなく、これが良い。
「ブラック・ブル？　お姉さん。それって確か、気性が荒い牛の魔物だよね？　それがどうかしたの？」
「うーん。一応先に言っておくと、今からそのブラック・ブルのお肉を食べようかって

いう話をしているの」
「なるほど。お昼ご飯の話だったんだねー！　わーい、お肉なんて食べられるの久しぶりーっ！」
……どうしよう。なんだかすごく不憫な気がしてきた。
いやまぁ、イナリがすごく美味しいって言っているし、神水を使って調理するから身体に悪い影響とかはないんだけど……魔物のお肉だよ？　喜んでいるけど、良いのかな？
「お姉さん！　早く行こうよー！　お肉っ！　お肉っ！」
「え……うん。そ、そうね。イナリ、ブラック・ブルは近くに居るの？」
「うむ。そこまで遠くはない。だが、アニエスたち三人は隠れていた方が良いであろう」
隠れる？　イナリが居るのに？
どういう事だろうと思いながらもイナリについていく。樹々の生い茂る山の中から、なだらかな草原が見えたところで、さっきの言葉の意味が分かった。
「めちゃくちゃたくさん居るのね」
「そうだな。三十体くらいか。倒すだけなら簡単なのだが、極力肉を傷付けぬように……」
となると、一体ずつ倒さねばならんので面倒だ。ここで待っているのだ」

そう言って、イナリが飛び出していったんだけど、あっという間に戻ってきた。
「終わったぞ」
「え？　ほんの数秒しか経ってないんだけど」
「うむ。この程度の相手に、数秒も要してしまった」
「あ、そういう感覚なのね」
おそらく、イナリは倒したそばから異空間収納に格納したのだろう。先程までは大きな黒い牛ばかりだったのに、今はのどかな草原が広がっている。
「アニエス。では、早速調理を頼む」
「……それは良いんだけど、私は牛を捌（さば）いた事なんてないわよ？」
「ふむ……では、これでどうだ？」
イナリの手が一瞬ブレたように見えたかと思うと、いつの間にかお肉屋さんで売られているようなお肉が、その手の上にのっていた。
きっと、今の一瞬で異空間収納からブラック・ブルを取り出して、私が扱えそうな大きさ――それでも、十二分に大きいけど――に切り分けて、残りをまた格納した……って、それを血の一滴もこぼさずにやってのけるのね。
「すごーい！　いつの間にかイナリさんが大きなお肉を持ってる！　これも魔法なの？」

「あ……うん。まぁそんな感じね。じゃあ、このお肉を料理するから、ミアちゃんはコリンと一緒に木の枝とかを集めてきてくれるかしら」
「はーい！　コリンちゃん、行こっ！」
コリンは優しいから何も言わないけど、ミアちゃんより年上だからね？
そんな事を思いながらも石でかまどを作り、イナリに異空間収納から調理器具や食器、野菜やパンなどを取り出してもらい、どう調理するか考える。
魔物とはいえ、どう見ても牛肉だし、イナリが美味しいお肉だって言っていたし、シンプルに焼こうかな。
一口大に切ったお肉を神水で洗い、軽く下味をつけたら、かまどの上に置いた鉄網に野菜と一緒にのせていく。
少しして火が通ったら、お皿にのせてできあがりっ！
「お待たせー！　できたよーっ！」
別の小皿に入れた、タレか塩をつけていただく。
「うむ。やはりアニエスの作る料理はうまいな！」
「お姉ちゃん。すっごく美味しいよ！」
「お姉さん……お、おかわり。おかわりがほしい！」

ものすごく簡単だったんだけど、皆がすごい勢いでお肉を食べていく。
あっという間にお肉がなくなると、イナリが追加のお肉を出してきた。
「アニエス。頼む」
さっきのも結構、大きな塊だったんだけど、同じものがもう一つ……でも、部位が違うのかな？
追加されたお肉も焼いて……同じ魔物なのに、部位が違うと味や食感も違うのね。
どちらも甲乙つけがたいくらいに美味しくて、気づけば三回くらい大きなお肉が追加されていた。
「お姉さん、おかわり！」
「ミアちゃん。流石に食べ過ぎじゃない？　ちょっと心配なんだけど」
「お姉さんが少食なんだよー。イナリさんなんて、細いのにミアの三倍以上は食べてるよ？」
「イナリは……その、たくさん食べる人だから」
「じゃあ、ミアもたくさん食べる人ー！」
「……これで最後にしましょうね。イナリも」
なぬっ!?　と、イナリが驚いてこっちを見てくるけど、どこかで止めないと、永遠に

食べ続けそうな勢いなんだもん。
それから、皆が食べ終えたので後片付けをしていると、早速頭が痛くなってきた。
「あー、いつもの頭痛だ。ミアちゃんは大丈夫？」
「うー、お腹が苦しいよー」
「だから食べ過ぎだって言ったのに。頭は痛くないの？」
「頭？　頭は痛くないよー。お腹だよー」
私には頭痛がきたけど、ミアちゃんはこないらしい。とはいえ、お腹が痛いと言っているので、二人で神水を飲む。
「すごい。お腹が痛くなくなった！　……どうなってるのー？」
私の頭痛だけでなく、ミアちゃんの食べ過ぎの状態異常？　まで治ったみたい。
ミアちゃんの言葉じゃないけど、ホントどうなっているんだろう？
それからイナリを呼んで、魔物を食べた事で何か変化が起こったか見てもらう。
「うむ。アニエスは突撃時強化がついておるぞ」
「突撃時強化？　なんなの、それ」
「どうやら、走って勢いをつけて攻撃すると、その威力が微増するらしい」
「……えっと、よく分からないけど、それってすごく微妙じゃない？」

勢いをつけて攻撃したら威力が増す……って、普通の事よね？
なんとも言い難い微妙な力だと思っていると、イナリが苦笑いしながら説明してくれた。
「あー、最初に言うか迷ったのだが、あのブラック・ブルはすごくうまいものの、弱いのだ。攻撃方法も、走ってきて体当たりしてくるだけだしな」
「えーっと、弱いから得られる魔法……いえ、魔法ですらなかったんだけど、その能力も微妙って事？」
「おそらくな」
これまで食べた魔物の事を思い返してみると、ブルードラゴンの成竜は氷魔法が使えるようになり、氷のオブジェが生み出せるようになった。
サンダードラゴンの雛（ひな）は小さな雷を発する事ができるようになり、コカトリスは石化耐性……って、やっぱり強い魔物であればある程、得られた能力もすごい気がする。
「ミアちゃん。ブラック・ブルっていう魔物のランクって分かるかな？」
「んーとね、確かC級じゃなかったかなー？　そんな事を誰かが言っていた気がするよー」
「つまり、使える魔法を増やそうとするなら、強い魔物をターゲットにしないとダメっ

て事なの⁉」

ちなみに、一応ミアちゃんもイナリに見てもらったんだけど、何も能力を得られていないらしい。

やっぱり、C級の弱い魔物だったからかな？

「ふむ……やはりここは、アース・ウォームにするしかないか」

「それはいやぁぁぁっ！」

「ミアとやら。アース・ウォームという魔物のランクは知っておるか？」

私は全力拒否したんだけど、イナリがミアちゃんに話を振る。

「アース・ウォーム？　確か、B級かA級だったような……」

「なるほど。では、行くか」

「行かないわよっ！」

ブラック・ブルのお肉をたくさん食べたのに、残念ながら、どの魔物をターゲットにするかという話に戻ってしまった。

だけど、どうやらこのあたりにいる強い土系の魔物は虫系の食べたくない魔物ばかり。

虫系の魔物を断固拒否した結果、弱くても良いから普通に食べられそうな魔物を、魔法を得るまで食べるという案が採用された。主に私の意見で。

まぁ食べられそうも何も、一般的に魔物は食べられないんだけど……それはさておき、あちこち歩き回って、三種類くらいの魔物を食べた。

「もう無理。私、これ以上食べられないんだけど」

「ボクもギブアップだよ」

「流石にミアもやめておこうかな」

私だけでなく、コリンとミアちゃんもやめておくと言うくらいだから、やっぱり相当な量を食べたのよね。たくさん歩いているからまだマシだけど、こんなにいっぱい食べたら身体に悪いかも。

「えっと、結局身についたのは、突撃時強化、靴擦(くつず)れ耐性、対植物耐性、方角察知……って、どれも微妙ね」

「でも靴擦(くつず)れ耐性は、新しい靴を買った時に良いんじゃないかなー？　ボク、新しい靴だとすぐに靴擦(くつず)れができちゃうから」

「方角察知も良いんじゃないかなー？　東西南北が分かるんだよね？　ミア、よく迷子になるもん」

うん。コリンとミアちゃんの言う通り、どちらも、あればちょっと幸せな感じがするよね。

だけど、どれも土の聖女に……というか、魔法に全く関係ないよね？
対植物耐性も、神水を使えば植物系の魔物ってすぐに倒せるし。
「まぁ結論としては、やはり弱い魔物では、微妙な能力しか得られないという事だな」
「うぅ……でも、虫だけは嫌ぁぁぁっ！」
「ふむ。おっ！　虫ではない土系の魔物で、そこそこ強く、かつそれなりにうまい奴の存在を感知したぞ！」
「本当っ⁉　じゃあ、それにしましょう！」
イナリの案内で、今度は森の中へ。
日がかなり傾いてきているし、時間的にも今日はこれが最後になるだろう。
あとお腹的に、食べるのは明日の朝ご飯かしらね。
満腹で辛いけど、少し早歩きで森の中を歩いていると、突然イナリが足を止める。
「ここまでだな。これ以上は奴の攻撃範囲に入ってしまう。ここでしばし待っていてくれ」
そう言ってイナリが姿を消したけど、攻撃範囲って言いながら、魔物らしき姿は全く見えない。
「あ……何か木が折れる音とかが聞こえてくるよ！」
「そうなの？　私には全然聞こえないわ」

「コリンちゃんは耳が良いんだねー」
コリンから、イナリが戦っているみたいだという話を聞いたけど、今までは音もなく、文字通り瞬殺って感じだった。今回は少し時間がかかっているように思えるのは、相当に強い魔物だという事なのだろう。
……まぁそもそも、これまでの時間が早すぎるっていうのもあるんだけどね。
それから少し待つと、イナリが戻ってきた。
「すまぬ。待たせたな。久しぶりに奴と戦ったが、少々手こずってしまったな」
「そんなに強い魔物だったの？」
「そうだな。今日の中ではダントツだな。とはいえ、我の敵ではないが」
「そうなんだ。ちなみに、なんていう魔物なの？」
「ふっふっふ……今回はあえて黙っておこう」
「え？　ど、どうしてっ⁉」
「その方が面白……こほん。何を食べたか当ててみるというのも一興であろう」
今、面白いって言いかけたよね⁉　つまり、変な魔物なの⁉
「イナリ。もしも虫だったら……」
「虫ではない事は約束しよう。もちろん、元のサイズのままでは調理できぬであろうか

ら、程よいサイズにしてアニエスに渡そう」
「……それって、調理前に見た目で何の肉なのか、私にバレるのを避けたいだけなんじゃないの？」
「むっ⁉　気づけば、日が傾いておるな。早くしないと夜になってしまうぞ。急いで街へ戻るのだ」
怪しいっ！　怪しすぎるんだけどっ！
食材については一切教えてくれず、そのまま街へ戻り、ミアちゃんの活動拠点に泊まらせてもらう事に。
今日は食べないけど、明日の朝……謎の食材を調理する事になってしまった。

「おはよう……」
「お姉さん、おはよーっ！　……どうしたの？　なんだか元気がないみたいだけど」
「あー、朝ご飯が謎のお肉だから、ちょっと心配でね」
ミアちゃんが拠点としている地下室は、薄暗いという難点はあるものの、ひんやりとしていて涼しいし、何か仕組みがあるのか、空気もちゃんと入れ替わっているように思える。

そのため、しっかり安眠できたんだけど、朝ご飯の事を思い出して少しげんなりしてしまった。
「あはは。でも、昆虫のお肉ではないってイナリさんが言ってくれているんだよね？　だったら大丈夫じゃないかなー？」
「でも食べ終わるまで何の肉か教えないって言っているんだよ？　まともなお肉じゃない気がするのよね」
「だけどミアは、ご飯が食べられるだけで感謝だよー。たとえ魔物でも、その命をもらう訳だしねー」
ミアちゃんがすごい事を言っている。
まるで聖女みたい……って、聖女なんだけどさ。
「そうね。命をいただく訳だし、私もこんな事を言ってはいけないよね」
「うん！　とはいえ、ミアも虫は嫌だけどねー」
やっぱりそこは同意見だよね……と話しつつ、普段着に着替えて部屋から出ると、ミアちゃんが作戦本部と呼んでいる部屋にイナリとコリンが居た。
ちなみに土の聖女の協力者さんたちはここに住んでおらず、毎日自分の家へ帰っているそうだ。

「さて、アニエス。早速この肉を調理してもらえるか？」
「えぇ。美味しい料理にして、しっかりいただくわ」
「む……何やら昨日とは感じが違うな」
ミアちゃんに言われちゃったからね。
この大きなお肉が何かは知らないけど、美味しく調理して……って、これは本当に何の肉なの⁉
調理をするため明かりを灯して確認してみたんだけど、イナリがカットしてくれていて、皮も取ってくれているから、見た目からは全く分からない。そのため、どう調理して良いかも分からないので、とりあえず小さく切って、野菜スープに入れてみた。
「できたわよー！」
私の声を聞いた途端に、三人が一斉に寄ってきて、躊躇（ちゅうちょ）なく謎の肉料理を食べていく。
「うむ。良い匂いがするな」
「お姉ちゃん。ありがとう！　いただきまーす！」
「お姉さん……これ、美味しいっ！」
皆普通に食べているし、私も食べよう。未だに何のお肉かは分からないけど。
「あ、美味しい。なんとなくだけど、鶏のササミみたいな感じね」

パンとスープの簡単な朝食を済ませると、少しがっかりした様子のイナリが口を開く。
「では、あの肉がなんだったかを話そうと思うのだが……アニエスの様子を見る限り、別に言わなくても良さそうだな」
「そこは教えてよ！　気になるじゃない！」
「む？　そうなのか？　何であろうと食べる……といった意気込みを感じたのだが。まぁいい。あれはヴリトラという魔物の肉だ」
「ヴリトラ！　……って何？」
フランセーズには居ない魔物なのか、聞いた事のない名前だ。
ミアちゃんなら知っているかな？　と思って見てみると、腰を抜かして床に座り込んでいた。
「ミアちゃん、どうしたの？」
「どうした……って、さっきのスープに入っていたお肉がヴリトラだって言うから、ビックリしちゃったんだもん」
「そうみたいね。ところで、ヴリトラってどんな魔物なの？」
「どんな……って、一言で表すと、大きな蛇だよ。S級の」
ミアちゃんによると、もっと南東の方に現れる魔物らしくて、こんなところに出現す

るのはかなり珍しいのだとか。
それにしても、あれは蛇のお肉だったのね。意外に美味しかったのと、虫ではないから別に平気かな。
虫ではなかった事に安堵していると頭痛がしてきたので、神水を飲んでイナリに見てもらう。
「おぉ、アニエス。やったぞ。土の魔法が使えるようになっているぞ」
強い魔物を食べた甲斐があって、ようやく当初の目的を達する事ができたようだ。
「とりあえず、イナリが使えるって言ってくれたから使えるんだろうけど、試すのはもっと広い場所の方が良いわよね？」
「そうだな。ヴリトラもドラゴンに匹敵する程の強さはあるからな。ブルードラゴンであの魔法だったのだ。街中で試すのはやめておいた方が良いだろう」
こそこそとイナリと話し、今回も新しい魔法は後で確認する事に。
その一方で、ミアちゃんが顔をキラキラ輝かせながら、私たちを見てくる。
「ねぇ、ミアは？　ミアはどんな魔法が使えるようになったのー？」
「あれ？　そういえば、ミアちゃんって頭が痛くなった？　新しく魔法を得る時は、ズキズキって痛みがあるんだけど」

「頭？　ううん、痛くないよー？　痛くならないとダメなの？」
「うーん。少なくとも、私が魔法を得る時はそうかな」
「うっ、頭がっ！　これでミアも魔法が使える？」
「……ミアちゃん。それ、本当に頭が痛いの？」
そう聞くと、ミアちゃんが悲しそうに首を横に振る。
昨日も今日も、ミアちゃんは私と同じくらいの量を食べているのに、何故なんだろう？
弱い魔物で何も得られなかったのは個人差なのかもしれないけど、今回は強い魔物なんだけどな。
「ふむ。コリンもそうだが、人間ではない者が魔物を食べても、魔法は得られないのかもしれぬな」
「えっ⁉　ミアちゃんって、獣人族だったの？」
「違うよー。ミアはドワーフなの」
ドワーフ⁉
それって、地下に住んでいて、鉄の加工が得意で、背が低いっていう、あのドワーフかな？
「そうだったんだ。でも、どうしようか。私と同じ方法で魔法を得るっていうのができ

立ち読みサンプルはここまで